

うーろん

高橋健一郎

1オーダー

缶ピースの甘い香りがする。
周りを見るも人は少ない。
仕事帰りに立ち寄るバー。

一人カウンターに座り、マスターと目が合う。

「いかがなさいですか」

シェイカーの音が鳴り響く店内。
マスターがそう呟く。

答えは決まっている。

常連客である俺にとって、この店での一杯目はいつも同じもの。

思い返せば、この店に初めて来た5年前から変わっていない。

当時の俺は、大学を卒業して社会に出たばかり。
右も左も分からない。
そんな時に先輩の行きつけの店ということで訪れた。

以来、この店は俺にとっての憩いの場。

5年が経っても、この店は変わらない。

「いかがなさいですか」

考えごとをしていたせいで、頼み忘れていた。

いや。

何事も深く考えてしまう。

そうさせる雰囲気がこの店にはある。

薄暗い店内。

客席は20弱。

客層は40代が中心。

静かにお酒を嗜めることができる。

「いつもので」

マスターは静かにうなづく。

グラスに注がれていく音も心地良い。

「いらっしゃいませ」

店内にまた一人男が入ってきた。

グレーのスーツに青のネクタイ。

ダークブラウンのパーマヘア

俺と同じ常連客だ。

男はポケットからタバコを取出し、一服。

「いかがなさいますか」

マスターがそう呟く。

この男もいつも一杯目は同じもの。

「ジントニック」

やはり今日も同じか。

俺のように「いつもの」と頼まないのは、
まだ2年くらいしか通っていないからか。

いや。

2年も通っていれば、マスターも分かっているはず。
ただでさえ客の少ない店。

男に「いつもの」と頼む気がないだけか。

それとも他に理由でもあるのか。

マスターが俺の注文した酒を静かに置く。

俺はグラスを手に持ち、口へと運ぶ。

やはり仕事帰りのこの一杯は最高だ。

そう。

おれの頼んだこの

ウーロンハイは。

